

訳者 大谷 哲\*

【解題】

以下に訳出するのは5世紀に活躍した教会史家ソクラテス=スコラスティコス Sokrates Scholastikos による『教会史』*Historia Ecclesiastica* のうち第7巻 第13章から15章である。ソクラテスは380年頃コンスタンティノポリス(現在のトルコ・イスタンブール市)で生まれ、学術教育を修めて法律家 *scholastikos* となった。『教会史』は彼の著作のうち唯一現存するものであり、全7巻が439年から450年の間に執筆された。内容はディオクレティアヌス帝が退位した305年からテオドシウス2世の治世である439年までの時代を記し、カエサリアのエウセビオスが書いた『教会史』の続編として企図されたと言える。全体として客観的な歴史叙述がソクラテスの特徴とされ、アタナシオスの著作や公会議議事録などを参照して構成されており、当該時代に関して、特にアレイオス派論争や初期修道制についての重要史料とされている。ソクラテスの生涯についてはわからないことも多く、その最期についても明らかではない。

以下に訳出した第7巻 第13-15章は、アレクサンドリアの女性哲学者ヒュパティアに対するキリスト教徒による残酷なリンチ殺害を証言するものとして、古くから注目を集めてきた。ヒュパティア自身に関する記述は極短く、第15章のみに限定されるが、ソクラテスはこの事件を当時のアレクサンドリア司教キュリロスとアレクサンドリア市長官オレステスの対立が生んだ一連の暴力的騒擾の帰結として描いているので、第13章から訳出した。ソクラテスはこの蛮行に憤り、キュリロスを非難しているが、ヒュパティア殺害がキュリロスの指示ないしは教唆によるものかについては、研究者たちの見解がわかれている。いずれにせよ、司教キュリロスが行った、異教徒・ユダヤ教徒・敵対するキリスト教徒宗派に対する暴力的な排除行為が、ヒュパティア殺害につながったことは疑い得なく、彼に責任の一端があることは否めないだろう。新プラトン主義者ダマスキオスは、この事件をキリスト教徒の反知性主義的暴力が生んだ最初の殺人事件と位置づけている(彼の著作『イシドロス伝』は現存せず、再構成のころみは様々あるが R. Asmus, *Das Leben des Philosophen Isidoros von Damaskios*, *Der Philosophischen Bibliothek*, Bd. 125, Leipzig, Meiner, 1911 をさしあたり挙げる)。

古代世界では稀な存在である女性哲学者としてのヒュパティアについて言及する史料は、ダマスキオスの断片や、ソクラテスによる当該箇所だけではない。ヒュパティアに哲学と数学を学び、後にキュレネおよびペンタポリス府主教となったシュネシオスは、ヒュパティアとその新プラトン主義哲学に多大な敬意を表し続けたことを書簡に書き残している(A. Garyza (ed.), *Epistolae Synesii Cyrenensis*, Rome, Instituto Poligrafico, 1979 における書簡 no. 10, 15, 16, 33, 81, 124, 154 を見よ)。ただ、残された彼の書簡からはヒュパティアの残酷な死についての言及は発見されず、このことはヒュパティア殺害事件以前にシュネシオスが亡くなっていた可能性が高いとみなされる根拠ともなっている。

\* 東北大学 大学院文学研究科 歴史科学専攻 ヨーロッパ史専修 博士課程後期

10 世紀に編纂された百科事典『スーダ』(*Suidae Lexicon*, Stuttgart: Teubner, 1971, vol. 4, 644-46) によれば、ヒュパティアが著述を残した分野は数学、天文学にも及んでいたという。またニキウのヨハネスという司教がギリシア語ないしコプト語で書いた年代記がアラビア語を経てエチオピア語翻訳の形で現存しているが、そのうち第 84 章の 87-103 節が、ソクラテスから引いたと思われるヒュパティアに関する記述となっている(英訳:R. H. Charles, *The Chronicle of John (c. 690 A.D.) Coptic Bishop of Nikiu*, Amsterdam, APA-Philo, 1916, 100-102)。

その他の史料としては、ヒュパティアの父であるテオンが書いた、プトレマイオスによる天文学書『アルマゲスト』に対する注釈書のうち、第 3 巻冒頭部分はヒュパティアが関わっていると考える研究者もいる(W. R. Knorr, *Textual Studies in Ancient and Medieval Geometry*, Boston, Birkhäuser, 1989)。一方、ヒュパティアがこの箇所ではせいぜいテオンの手伝いをしたに過ぎないと考える研究者もおり(A. Cameron, “Isidore of Miletus and Hypatia: On the editing of mathematical texts”, *Greek, Roman and Byzantine Studies* 31, 1990, 103-127), 議論は決着していない。

また、アリウス派であったためにその著作の大部分が現存していない教会史家フィロストルギオスが、ほぼ同時代人としてヒュパティアに関して記述をしており、これが 9 世紀にコンスタンティノスのフォティオスによって要約され保存されている。これは J. P. Migne が編纂・出版したギリシア教父著作シリーズ *Patrologiae Graecae* (Paris, 1857-1866:以下PG) の 65 巻, 563-64 欄において見ることができる。あるいは 6 世紀の歴史家ヨハネス＝マララスもその『年代記』の中でわずかにヒュパティアに言及しているし(PG 97, 535-36), 9 世紀初頭に 7-8 世紀の歴史を年代記としてまとめたテオオフアネスもさらに短い言及をしている(PG 108, 225-6)。

このようにして見ると、ヒュパティアの学問における貢献や思想についての叙述は少ないものの、その衝撃的な死の状況について最も頼りになる史料はここに訳出したソクラテス『教会史』となるだろう。この拙訳が読者に何らかの益あるものであれば幸甚であるし、遙か 1600 年の昔、知の都としての名を馳せたアレクサンドリア市が、ローマ帝国の変容の中で一つの時代を終える瞬間へと読者の想いを誘ってくれればさらに望外の喜びとなる。誤訳や多くの至らない点については斧正をもって正していただきたく思う。

校訂本は PG 67 を使用した。従って[760]-[769]と訳中に示したのは Migne による欄番号である。また、訳出にあたり Ph. Schaff and H. Wace, *Socrates, Sozomenus: Church Histories*, (A Select Library of Nicene and Post-Nicene fathers of Christian Church: second series), vol. 2, Oxford, London, 1890, 159-160 を参照した。〔 〕内は訳者による補いである。

【翻訳】

[760]

第 13 章

(キリスト教徒とユダヤ教徒の対立—とりわけ司教キュロスと長官オレステスの間の対立)

同じときに以下のような理由でアレクサンドリア市からユダヤ人住民がキュロスによって排斥されたのである。[761]アレクサンドリア市民は他のどこの民よりも騒動を好む人々であり、そしていつ如何なるときも口実を見つけ、もっとも過激な残忍さで暴発するのだ。そのため決して流血なくしては終息しないのである。今度の場合、騒乱は群集の中から生じたのだ、それも何ら深刻で重要な原因からではなく、ほとんど全ての諸都市において極めて人気のある害悪、すなわち歌舞の見世物というお楽しみから。ユダヤ人たちはサバトの慣習から離れていたのだ、律法を聞くことにはなく劇場の娯楽に聞き入ることに時間を費やし、その日にも踊り子たちは大いに聴衆を集め、無秩序が殆ど常と言って良いほどに生み出されていた。たとえある程度アレクサンドリアの総督によって統制されていたとは言っても、ユダヤ人たちはこうしたやり方に反対し続けていたのである。そして彼らはいつもキリスト教徒に対して敵対的だったとはいえ、踊り子たちについてはキリスト教徒に対してさらなる反対姿勢をとっていたのだ。それゆえ長官オレステスがある布告を發布したとき、見世物の規制のため劇場の中で公示が呼ばわれることが慣習となっていたので、司教キュロス一同のうち何人かが発行される命令の特質を知ろうと臨席していたのである。彼らの中にはヒエラクスとか言う、文学の初歩的な分野の教師と、司教キュロスの説教の極めて熱心な聴衆で、見た目の凶々しきで異彩を放っていた者がいた。この者を劇場の中でユダヤ人たちが認め、彼らは、彼は他の何事でもなく人々を煽動することのためにやってきたのだと突如として叫び出したのである。[764]さてオレステスは長らく司教たちが精力を伸ばすのに嫉妬を覚えていた。何故なら彼らは皇帝から任じられた官職者たちの裁判権を侵害していたからである。特に、キュロスはオレステスの法廷に密偵を入り込ませようとしていたのだ。それゆえ彼はヒエラクスを捕らえるように命じ、公然と劇場で彼に拷問を受けさせたのである。キュロスは、これを報せられて、ユダヤ人たちの主導者たちを呼び寄せ、最大の苛酷さをもって彼らのキリスト教徒たちへの嫌がらせを止めるよう脅迫した。ユダヤ人の群集はこの脅しを聞いて、その暴力を抑える代わりに、さらに憤激するばかりで、キリスト教徒を破滅させる諸々の陰謀を生じさせることになったのである。その一つが彼らのアレクサンドリアからの排除原因として、極めて血にまみれた象徴となった。それが私が今から描こうとすることである。互いに見分けられるようにと一人ひとりが椰子の枝の皮でできた輪を指にはめ、彼らはキリスト教徒に夜討ちをかけることを決めたのだ。その結果彼らは道々に、アレクサンドリアにちなんで名づけられたかの教会が燃えたと叫びを上げさせるため人を送ったのである。それゆえ多くのキリスト教徒たちはこれを聞いて走り出てきたのである。ある者はこちらから、またある者はあちらからと、彼らの教会を守らんと大いに心配して。ユダヤ人たちは突如襲い掛かり、彼らを虐殺したのである、容易くお互いをその輪で見分けて。夜明けには、この残虐行為の張本人は隠しおおせなくなっていた。そしてキュロスは、大勢の民衆の群れに付き添われてシナゴーグ—彼らが彼らの祈りの家と呼ぶところ—へと

赴いたのだ。彼らをそこから引き離し、群衆に彼らの財産略奪を許し、ユダヤ人をかの都市から追放するために、それゆえマケドニアのアレクサンドロスの時代からかの都市に居住していたユダヤ人はそこから駆逐され、全ての所有物を剥ぎ取られ、ある者はあちら、またある者はこちらへと散り散りになった。彼らのうちの一人、アダマンティオスという名の医師は、コンスタンティノポリス司教アッティクスのもとへと逃れ、キリスト教への信仰を告白し、後のあるときアレクサンドリアに戻り、そこに居を据えた。しかしアレクサンドリア市長官オレステスはこうした処置に大層な怒りで満たされ、このような規模の都市が突如そんなにも人口のかなりの部分を奪われたことを過剰に嘆き悲しんだ。そのため彼は即座に出来事全体について皇帝へと連絡したのである。キュロスもまた、ユダヤ人たちの無法な振舞いを描いた手紙を皇帝に書き、[765]その一方では調停に関して仲立ちすべきオレステスに使いを送った。そのため人々は彼にそうするようにと勧めたのである。オレステスが友好的な打診を拒絶すると、キュロスは彼に向かって福音の書物を広げた。信仰への敬意は彼をしてその敵愾心を捨てさせしめるだろうと信じていたのである。しかし、これすらもオレステスには何らの平和的な影響をもたらさず、彼が執念深い敵意を司教に向けたので、以下の出来事がその後起こったのである。

## 第 14 章

(ニトリアの修道士たちが下ってきてアレクサンドリア長官に対する暴動を起す)

かつてテオフィロスがディオスコロスとその仲間たちに対して不正にも武装させた、極めて燃え立ちやすい気性の、ニトリアの山々に居住する修道士たちのうち何人かが、再び燃え盛る熱情に夢中となり、キュロスのために戦おうと決意した。それゆえ彼らのうちおよそ 500 人がその修道の家を放り出し、かの都市へとやってきた。そして馬車に乗った長官に出くわし、彼を異教崇拝者と呼び、彼に多くの他の口汚い渾名をつけたのである。彼はこれをキュロスによる自分への畏だと考え、自分はキリスト教徒なのだ、かつてコンスタンティノポリス司教アッティクスによって洗礼を受けたのだと叫んだ。しかし彼らは彼の主張にほとんど注意を払わず、そのうちのアンモニオスとかいう名の一人はオレステスに石を投げ、その頭に命中し、彼は傷口から流れ出した血で覆われたのである。わずかの者を除いた全ての護衛は石で打たれて死ぬことを恐れ、ある者はこちらへ、またある者はあちらへと逃げ失せ、群集の中に紛れ込んだ。その間アレクサンドリアの民衆は総督を救うために走り来て、残りの修道士たちは追い散らしたが、アンモニオスを捕らえ、長官へと引き渡したのである。彼は即座にその男を公然と拷問にかけたが、その拷問の影響で、それもそう長くはなく、彼が皇帝に何が起きたのかを説明した後に、その男が死ぬほどの苛酷さをもってその拷問は科された。他方キュロスもまたこの事件に関する自分の主張を皇帝へと送りつけた。そしてアンモニオスの遺体かとある教会に預けられるようにし、彼にタウマシオス[θαυμάσιος“称賛に値する”]という新たな称号を与え、彼が殉教者たちの一人として記録されるように命令し、信心を守るための闘いにおいて命を落とした者として、教会における彼の偉大さへ賛辞を呈したのである。[768]しかしながらより冷静な者ならば、たとえキリスト教徒でも、キュロスの偏見に満ちた判断を受け入れはしなかった。

人々は彼がその刑罰を自身の無分別のせいで被ったこと、そしてアンモニオスはその生命を拷問の下で失ったのはキリストを否定しまいとしてではなかったことをよく知っていたからである。キュリロス自身このことを了解しており、沈黙のうちにかの状況の記憶が次第に明らかとなってくることに悩まされた。しかしキュリロスとオレステスの間の敵対意識はこの段階では如何なる方法でも弱まることはなく、以前と同じようなある出来事によって新たに燃え立ったのであった。

## 第 15 章

(女性哲学者ヒュパティアについて)

アレクサンドリアに、哲学者テオンの娘で、彼女の時代の全ての哲学者たちを遥かに凌ぐほどの文学と科学における学識をなした、ヒュパティアという女性がいた。プラトンとプロティノスの学統を受け継ぎ、彼女は、その多くが彼女の講義を受けるため遠くからやってくる聴衆に向けて哲学の諸原理を説明した。彼女が精神の教化の結果獲得した冷静さと物腰における気取りの無さのゆえに、彼女は往々にして政務官の臨席の際に公けの場に姿を現した。彼女は男たちの集まりに来ることを恥ずかしがったりはしなかったのだ。全ての男たちが彼女の非凡な品位と徳性ゆえに、彼女をさらに認めていたのである。それにもかかわらず彼女は当時蔓延していた政治上の嫉妬心に倒れたのである。彼女が頻繁にオレステスと面会していたので、オレステスがかの司教と和解することを妨げているのは彼女だと、キリスト教徒の群れの間では中傷的に報じられていたのだ。それゆえその中の何人かが、獐猛で凝り固まった熱意に駆り立てられた。その首謀者はペトロスといい、彼女が家に帰るのを待ち伏せ、彼女を馬車から引きずり出し、カエサリオンと呼ばれる教会へと彼女を連れ去った。[769]そこで彼らは彼女を真っ裸にし、それから瓦で<sup>1</sup>彼女を殺害したのである。彼女の遺体を細切れに引き裂いた後、彼らははずたはずたにした四肢をキナロンと呼ばれる場所に置き、そこで燃やした。この事件は、キュリロスだけでなく、アレクサンドリア教会全体にとりわけ不名誉をもたらした。間違いなく、虐殺や闘争、そしてそうした類いの行為を許容することはキリスト教の精神からもっともかけ離れているのだ。このことはホルウス帝が 10 回目の執政官、テオドシウス帝が 6 回目の執政官、キュリロスの司教位 4 年目に、四旬節の間、三月に起こった<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> ὀστράκοις, 逐語的には“牡蠣殻”。しかしこの単語は家の屋根に用いる屋根瓦にも適用される。

<sup>2</sup> 紀元後 415 年のことである。

【参考文献】

- M. A. B. Deakin, “The Primary Sources for the Life and Work of Hypatia of Alexandria”, *History of Mathematics Paper*, no. 63, 1995.
- W. Frost, M. A. B. Deakin and M. Wilkinson, “The *Suda* Article on Hypatia”, *Monash University History of Mathematics Pamphlet*, no. 61, 1995.
- J. Reedy, “The life of Hypatia from *Suda*”, *Alexandria*, no.2, Grand Rapids, Michigan, Phanes Press, 1993.
- E. Watts, “The Murder of Hypatia: Acceptable or Unacceptable Violence”, H. Drake (ed.), *Violence in late Antiquity: perceptions and practices*, Ashgate, 2005, 333-42.
- A. H. M. ジョーンズ著 戸田聡訳 『ヨーロッパの改宗：コンスタンティヌス《大帝》の生涯』 教文館 2008年
- 保坂高殿『ローマ帝政中期の国家と教会—キリスト教迫害史研究 193-311年』 教文館 2008年 86-88頁
- 松本宣郎「煽動家としての司教たち—アタナシオスの場合」 平田隆一・松本宣郎『支配における正義と不正』 南窓社 1994年 197-220頁